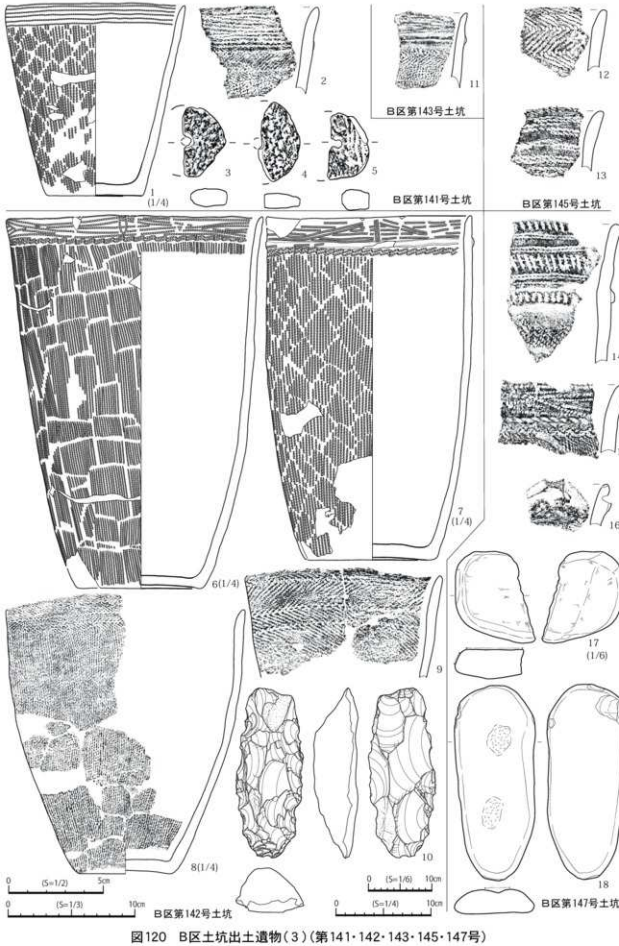

図120　B区土坑出土遺物(3)(第141・142・143・145・147号)

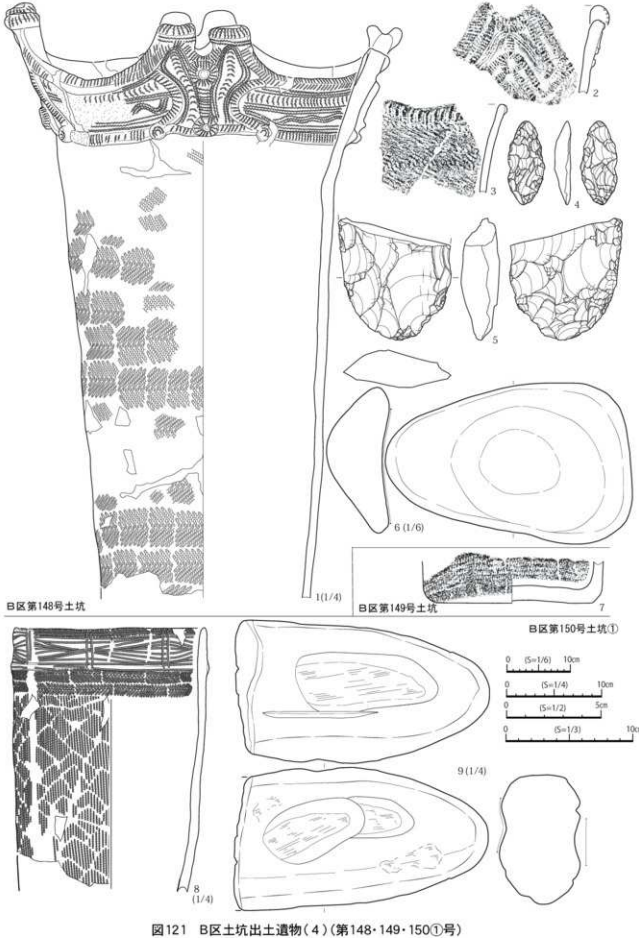

図121　B区土坑出土遺物（４）（第148・149・150①号）

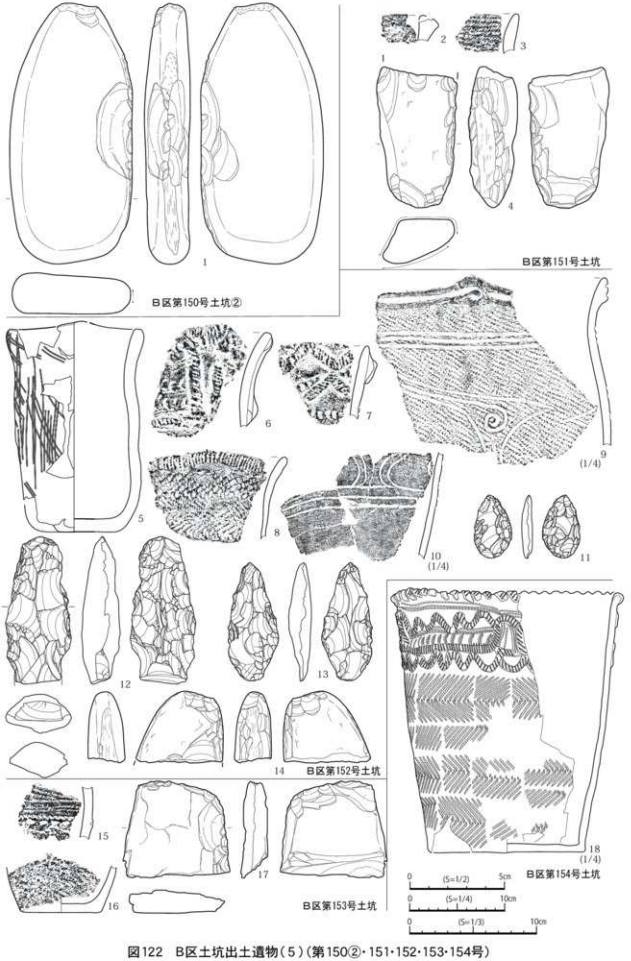

図122　B区土坑出土遺物(5)(第150②・151・152・153・154号)

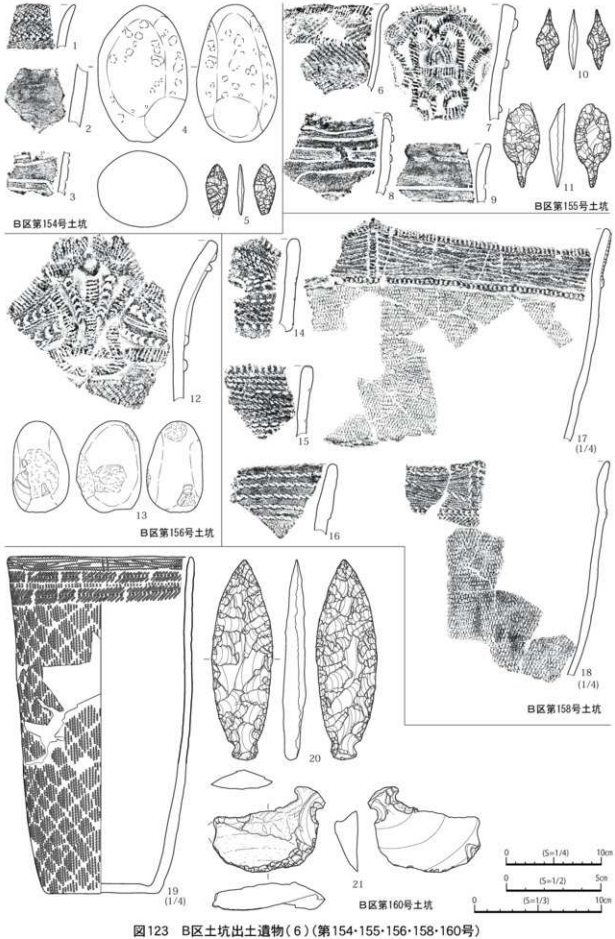

図123　B区土坑出土遺物（６）（第154･155･156･158･160号）

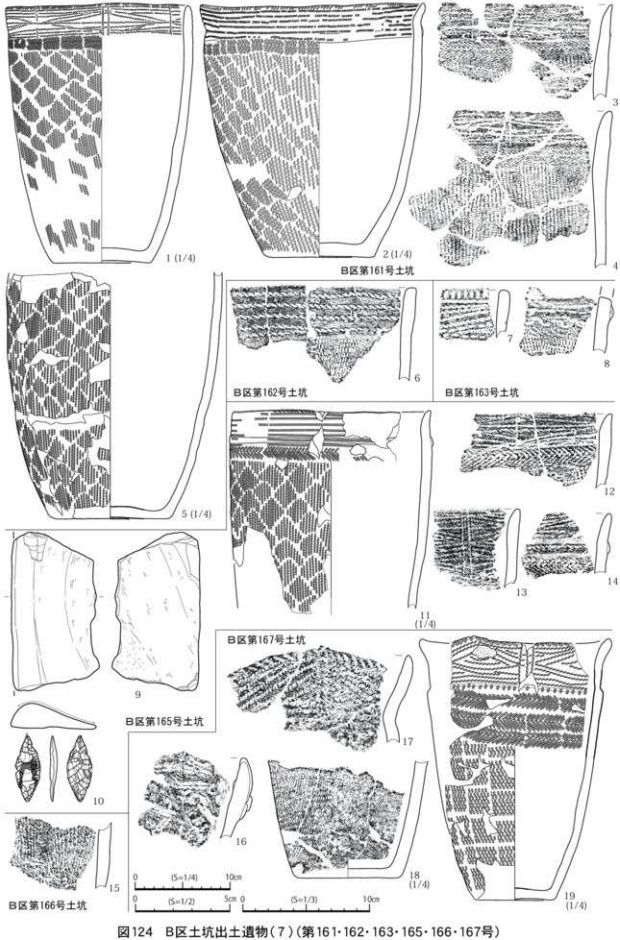

図124　B区土坑出土遺物(7)(第161･162･163･165･166･167号)

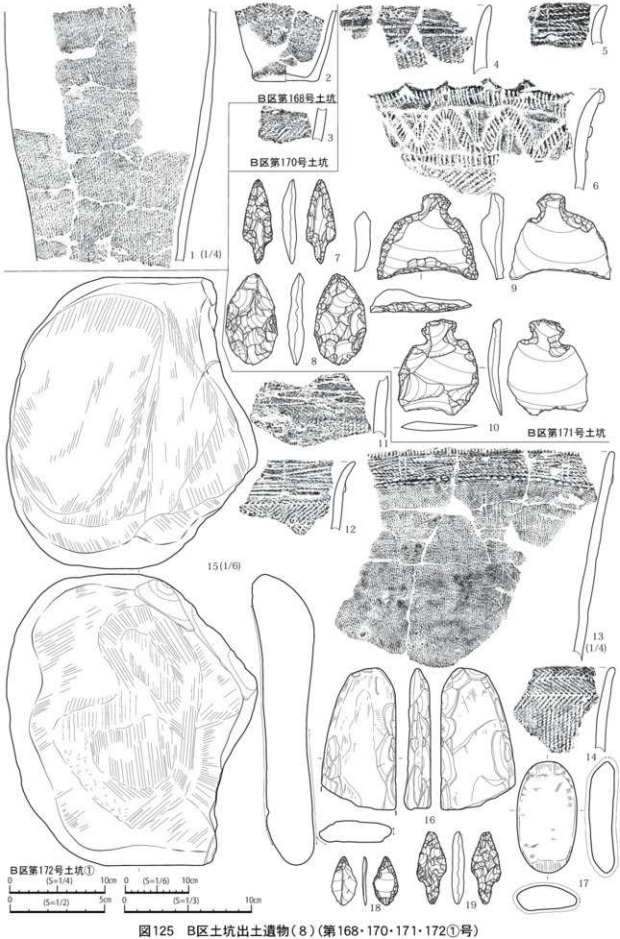

図125　B区土坑出土遺物（８）（第168・170・171・172①号）

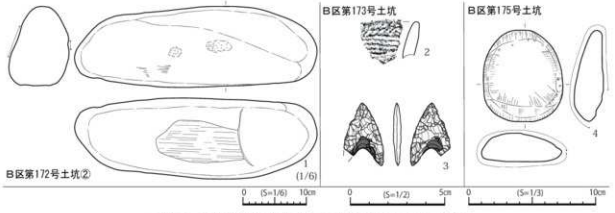

図126　B区土坑出土遺物(9)(第172②・173・175号)

3　土器埋設遺構(図127・128)

検出順に第8号～第13号土器埋設遺構まで遺構番号を付したが、調査の結果、第10号土器埋設遺構は沢支流4出土遺物、第12・13号土器埋設遺構は小ピット(柱穴)の覆土出土遺物と判断したため、欠番としそれぞれの項で図示した。本稿では第8・9・11号土器埋設遺構について記載する。

B区第8号土器埋設遺構(BSR-8)(図127)

【位置・確認】ⅩⅣO-128グリッドに位置し、Ⅲ層上面を精査中に検出した。【掘り方】明瞭な掘り方は検出できなかったが、調査時に若干の土色の違う範囲を識別できたことから、それを掘り方推定範囲として図示した。【土器】Ⅱ群A類の土器を使用している。口縁部は欠損しているが、口縁部文様帯の一部から底部まで出土した。口縁部文様帯内には隆帯が施されており、隆帯上にはL縄の側面圧痕が施されている。また、馬蹄形状の圧痕が横位に連続して施されている。胴部には結束第1種羽状縄文が横回転施文されている。

B区第9号土器埋設遺構(BSR-9)(図127、128)

【位置・確認】ⅩⅣN-130グリッドに位置し、Ⅲ層下面を精査時に検出した。【掘り方】遺構検出面で50cm×40cmの掘り方範囲を確認した。【土器】検出できたのは底部付近のみである。しかし、整理時に沢支流3から出土した土器と接合でき、完形に復元できた(図128-1)。図128-1はⅠ群B類の深鉢型土器で、器形は楕円形状となっている。そのため、実測図は正面図と側面図を作成し掲載してある。口縁部文様帯内にはLRとRLの縄を用いた側面圧痕が施されており、胴部と口縁部文様帯の区画には隆帯が用いられている。胴部文様はRLRの縄が斜回転施文されている。なお、土器の底部付近から半円状扁平打製石器が出土しており、図示してある(図128-2)。

B区第11号土器埋設遺構(BSR-11)(図127)

【位置・確認】ⅩⅣM-130グリッドに位置し、Ⅲ層下面を精査時に検出した。【掘り方】明瞭な掘り方は確認できなかった。【土器】口縁部から底部付近まである土器が倒立した状態で埋設されていた。使用されている土器はⅠ群A類の土器(図127-2)である。文様は口唇部の直下と、口縁部文様帯と胴部文様帯を区切る位置に、LRの縄を用いた側面圧痕が施されており、口縁部文様帯内には単軸絡状体1類が横回転施文されている。胴部にも単軸絡状体1類の回転施文が施されているが、口縁部とは回転方向が異なり縦回転施文されている。【小結】当該期の土器埋設遺構は本遺跡で初の検出である。　(小山)

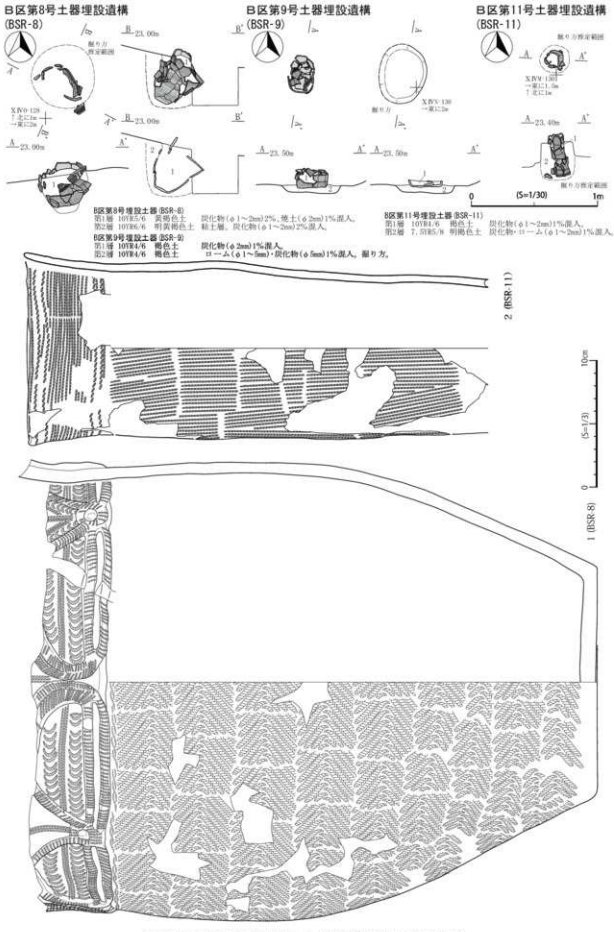

図127　B区土器埋設遺構・土器埋設遺構出土遺物（１）

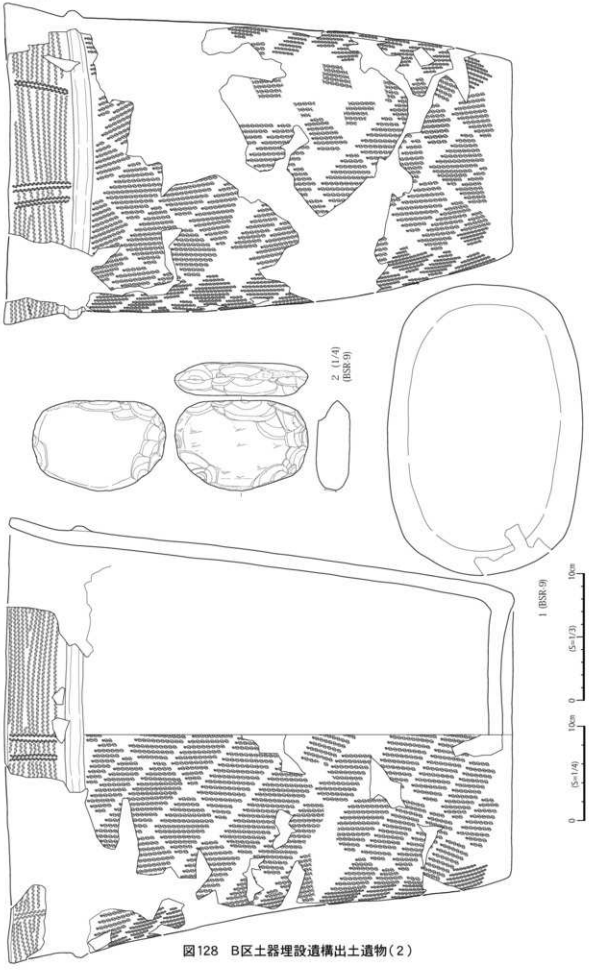

図128　B区土器埋設遺構出土遺物(2)

4　西捨て場(図129～図166)

２次調査で2箇所の捨て場を検出し、捨て場が形成された地点から名称を付け精査した。Ａ区北捨て場については、既に山田(2)遺跡Ⅱ発掘調査報告書で記述した。以下に、Ｂ区に検出された西捨て場について記述する。

【検出と調査状況】 平成20年の8月中旬に、Ｂ区西側斜面部のⅢ層の掘り下げ作業に着手した。土器の出土が目立ち、丘陵平坦部の遺物包含層よりも遺物量が多いことから、掘り下げ範囲を拡げて作業した結果、どの地点も遺物の密度が濃いため、捨て場として調査した。平成18年度の調査時にも、本捨て場の範囲内に2カ所のトレンチ(ＴＲ7と11)が設けられ調査されていたが、この時点では捨て場と判断されていなかった。２次調査では、多数の遺構のほかＡ区北捨て場の精査にも時間を要していたため、本捨て場の検出は当該年度の調査予定を大きく変更する要因となった。本捨て場の調査では、作業員の大半を遺物の検出にあて、まず捨て場の範囲と基底を捉えることとし、次に遺物の出土状況と遺構の存否を確認しながら掘り下げを行った。遺物は面的な広がりをみせるが、砕片も多く、特異な遺物以外は写真記録にとどめて取り上げを行った。10月上旬には捨て場全体の出土状況写真を撮影できるまで掘り下げ、同中旬には遺物の取り上げを終了した。

【立地と規模】 調査区内の本捨て場の範囲は、図示したⅩⅣＰ～ⅩⅤＱ-120～125の範囲であり、一部Ａ区に拡がるがＢ区を主体に73グリッド・約1,020㎡にわたる。調査区内は緩斜面の落ち際で、捨て場の縁辺部で投棄の開始口にあたる。捨て場は丘陵中央部の西側斜面に形成されており、緩斜面の傾斜は捨て場の中央部(土層Ｅライン)で約21°、南側(土層Ｆライン)と北側(土層Ｃライン)で約10°である。捨て場の大部分は、沢の本流に面した西斜面の下方に拡がっているもので、その範囲はおよそ3,500㎡ほどあるものと想定される。

【層位】 堆積土の確認は調査区内に設けたベルト(土層Ｃ～Ｆ)と境界面(土層Ａ･Ｂ)で行った。各層はほぼ基本層序と同じであるため、同じローマ数字で区分した。Ⅰ層とⅡ層は基本層序と同じであり、Ⅲ層とⅣ層は焼土粒・炭化物粒の過多により多少異なるため細分した。Ａ区北捨て場では、層の中に遺物と土砂のほか焼土や炭化物の薄い層が筋状に堆積していたが、本捨て場ではそのような土砂などの廃棄の様相を示す堆積状況は見られない。遺物はⅡ層からⅣ層まで出土しているが、特にⅢ層からのものが多く、中でもⅢｂ層からの出土が多い。

【遺物の出土状況】 Ⅲ層を主体に遺物が密に包含されており、土器は総重量約1,136kgが出土した。剥片石器では、石鏃76点、石槍81点、小型石槍95点、石篦48点、石槍または石篦の破損品8点、石錐20点、石匙72点、楔形石器3点、スクレイパー類217点、両面調整石器30点、石核562点、Ｒ･ｆ33点、Ｕ･ｆ14点が出土した。礫石器類は、磨製石斧40点、敲き石と磨り石(北海道式石冠含む)があわせて100点、抉入扁平磨製石器9点、半円状扁平打製石器23点、擦り切り具1点、凹み石24点、砥石6点、石皿･台石類10点が出土している。また、捨て場範囲内から、剥片・砕片が約44.6kg出土している。

北捨て場と同様に、これらと共に土製品・石製品の他、頁岩原石や礫が多数混在して出土しており、礫には被熱破砕したものも少なくない。土器は、円筒下層ｄ式が最も多く円筒上層ａ式がこれに次ぐ。他に少量の中期中葉以降の土器が混在して出土している。完形個体のものは少なく大多数が細かい破片で出土している。なかには、一部に小規模に敷かれた様な出土状態や、同一個体の破片や個体が潰れた状態のものもあるが、完全に復元されるものは多くはない。石器・石核は各層から土器や剥片・砕片と

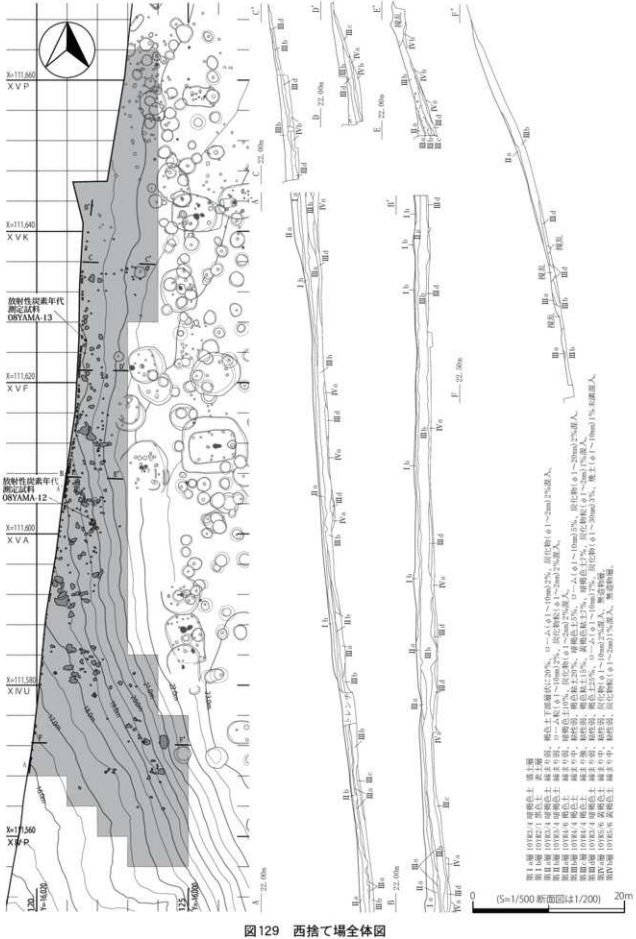

図129　西捨て場全体図

混在して出土しているが、北捨て場に見られた、廃棄と捉えられる様な剥片・砕片の集中はみられない。グリッド別の数量では、第5章で図示してあるように土器・石器類共にXVB～XVD-121グリッドの出土が多く(図245・256)、台地から廃棄された遺物が斜面下位側に流れているものと判断される。

調査時に来跡された方々に、本捨て場の遺物の出土状況について「西捨て場は土器が多く石器類が極端に少ない。」と説明したが、土器を残して自然礫と石器類を先に取り上げていたことによる誤認であり、実際には、西捨て場からも相当数の石器類が出土している。　(小田川)

【出土遺物】土器は時期毎に、石器は器種毎に図示する。

土器(図130～140)：縄文時代前期後葉から後期前葉までの土器がみられるが、Ⅰ群からⅡ群、なかでも前期末葉から中期初頭にかけての土器が主体である。

図130-1～8はⅠ群A類で、前期後葉の円筒下層c式に比定される。図130-1～5は口縁部に単軸絡条体5類や6類が回転施文されている。図130-6～8は頸部から胴上部の広い範囲に複節縄文の横回転施文が、胴部には単軸絡条体1類が縦回転施文されるもので、8では口縁部にも単軸絡条体1類が回転施文されている。また側面圧痕が施される図137-1や2は本類に伴う可能性が高い。

図130-9～図136はⅠ群B類で、前期末葉の円筒下層d式に比定される。共通する手法は口縁部に原体の側面圧痕を施すことであるが、口縁形態については概ね平口縁のもの(図130～133、図136-8・9)と、波状口縁のもの(図134～136-7)がみられる。

平口縁のものは、口縁部幅は約3～4cmで、2cm未満のものは稀である(図130-14等)。側面圧痕には単節・複節縄文や単軸絡条体1類を使用し、三角形状や菱形状のほか、単純に数条の圧痕を並行させ、最後に縦位の圧痕を1～3本単位で施すものが大半であるが、単軸絡条体5類または6類の側面圧痕を使用するものもみられるほか(図133-2等)、圧痕間に刺突を施すものも多い(図132-4等)。また口唇部にRL縄文等が回転施文されるものや(図131-1等)、頸部境界に側面圧痕の施された隆帯の貼り付けられるもの(図131-2等)も多数みられるが、刺突が施されるものも目立つ(図132-3等)。頸部には結束第1種の羽状縄文のほか結節回転文もわずかにみられる(図131-4等)。胴部は縦走縄文であるが、単節・複節縄文の斜回転施文(図130-10～図131-7)は少なく、単軸絡条体1類の縦回転施文(図131-8～16)や多軸絡条体の縦回転施文(図132-3～図133-10)が多いのも特徴である。

波状口縁のものは、口縁部幅は4～5cmと広いが、原体の側面圧痕を使用し、三角状等のモチーフを描く点については平口縁のものと共通であり、口唇部の施文や頸部境界の隆帯等も大きな違いはない。また4単位の波状口縁を基本とし、山形状とM字状の波頂部形態がみられるが、波頂部に縦位の隆帯やボタン状の貼付が施されるものが多数みられる(図134-10・11、図135～136-6・11～13)。また橋状把手が施されるものや(図135-3、図136-1等)、貫通孔(透かし孔)のあるもの(図134-6等)も数点出土している。胴部については複節縄文の斜回転施文はなく、単軸絡条体1類や多軸絡条体の回転施文が主であるが、単軸絡条体1a類の縦回転施文(図135-4等)や単節または複節縄文の横回転施文(図134-9、図135-7等)、結束第1種の横回転施文(図134-3等)もみられる。また横位や縦位の結節回転文が施される個体もある(図134-10、図135-7等)。

これらのⅠ群B類土器については以上のような特徴から、概ね図130～131が円筒下層d1式に、図132～136が円筒下層d2式にそれぞれ比定されるものとみられるが、主体となるのは後者の円筒下層d2式である。図136-9は同一個体がB区第11号竪穴住居跡から出土しているが(山田(2)遺跡Ⅱ

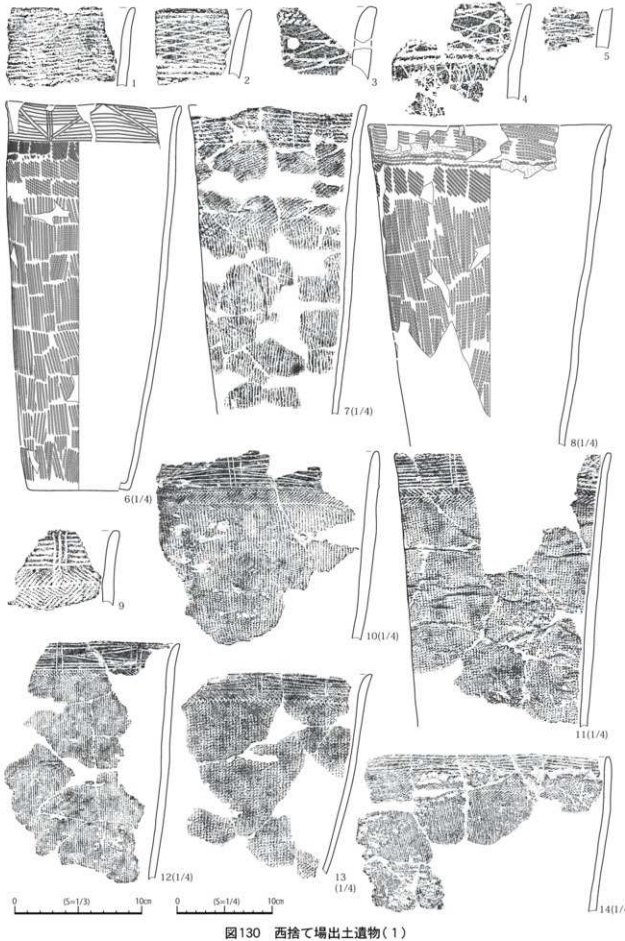

図130　西捨て場出土遺物(1)

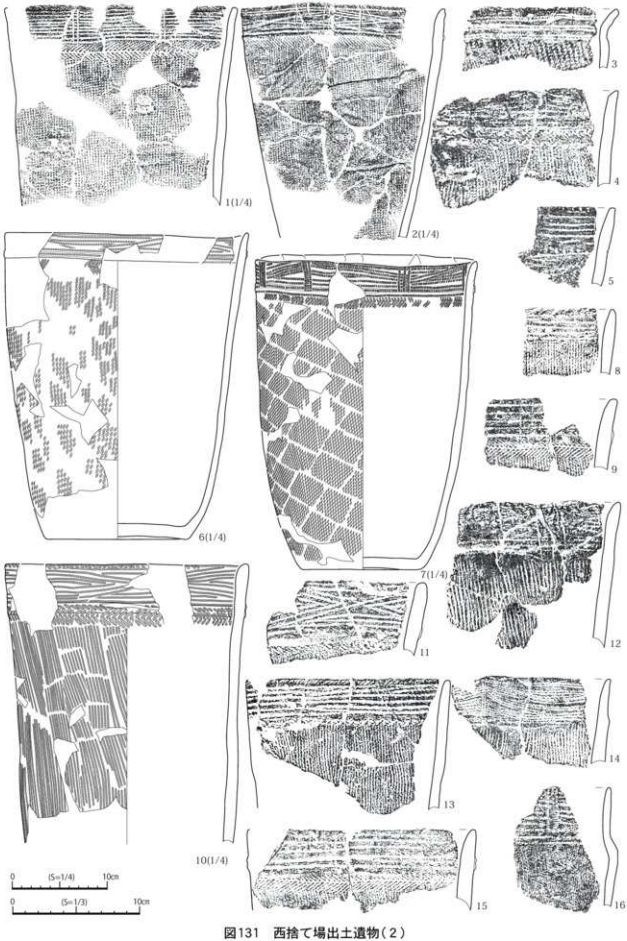

図131　西捨て場出土遺物（２）

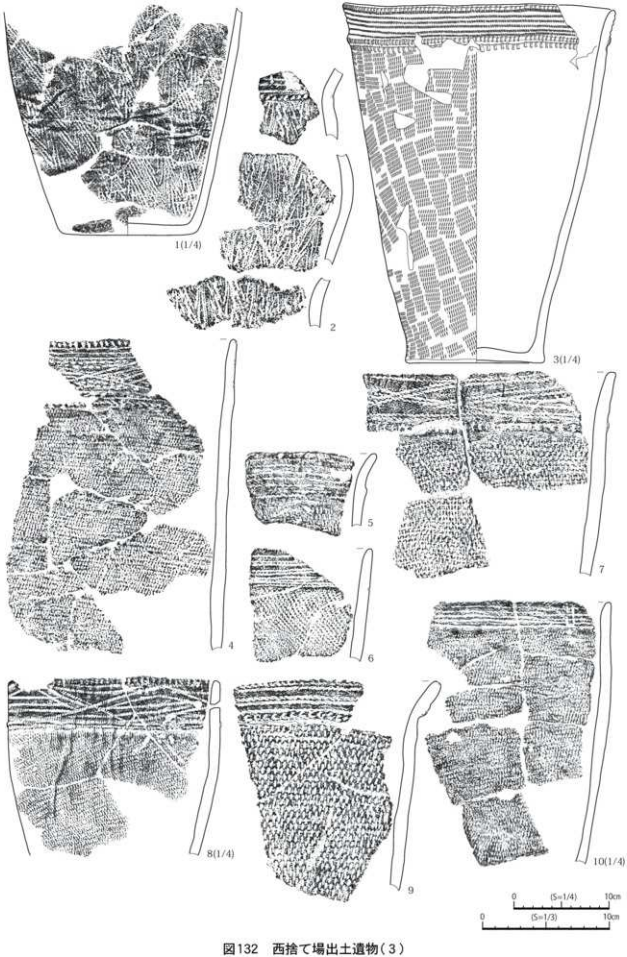

図132　西捨て場出土遺物(3)

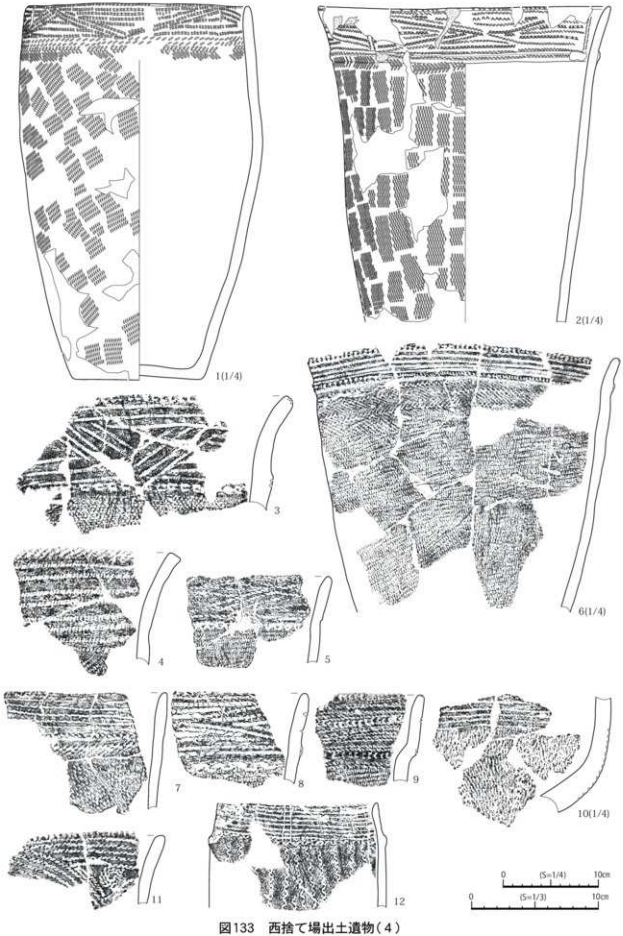

図133　西捨て場出土遺物（４）

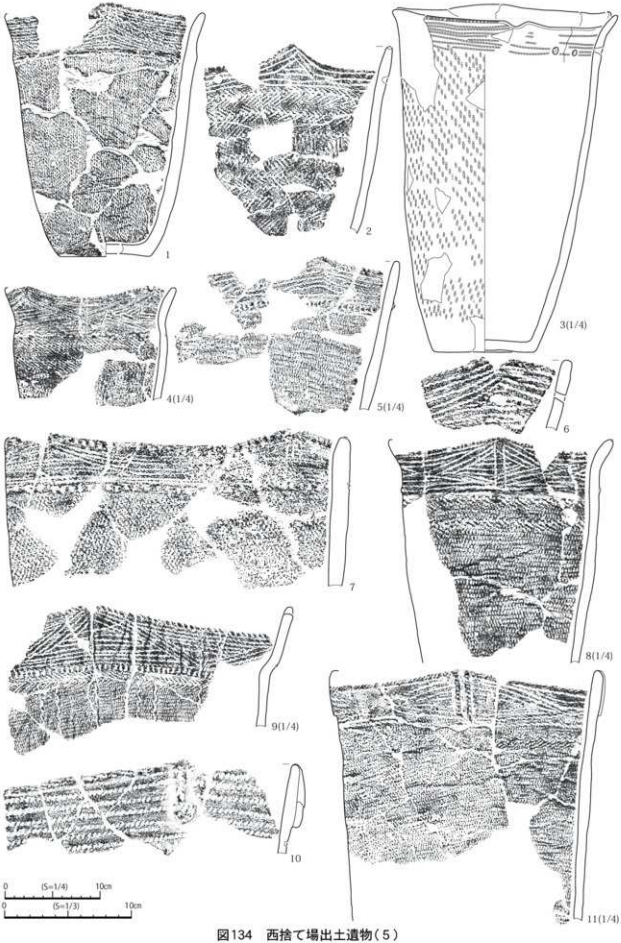

図134　西捨て場出土遺物(5)

図135　西捨て場出土遺物（６）

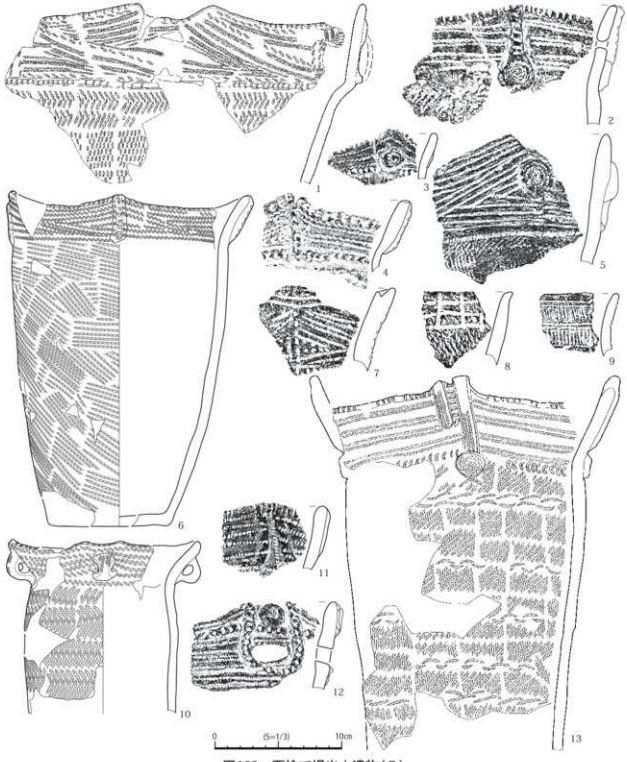

図136　西捨て場出土遺物(7)

報告書)、図136-8の沈線文が施されるものもこの段階に伴うものであろう。

図137はⅠ群C類で縄文時代前期の粗製土器を一括した。図137-1～7・16は口縁端部や頸部付近に原体の側面圧痕が施されるものである。図137-1・2・7は胴部に単軸絡条体1類が施されるもの、図137-3・4・6・16は胴部に複節縄文が斜回転施文されるもので、他遺跡例との比較から前者はⅠ群A類に、後者はⅠ群B類に伴う可能性が高い。図137-16についてはB区第21号土坑から同一個体が出土している(山田(2)Ⅱ遺跡報告書)。図137-9～15・17～19・23は口縁部に結束第1種の羽状縄文

のみが施されるもので、胴部は複節縄文の斜回転施文(図137-9等)のほか単軸絡条体1類(図137-15)や多軸絡条体の回転施文(図137-23)であり、基本的にⅠ群Ｂ類に伴うものであろう。図137-20は単軸絡条体1類のみ施されるもの、図137-21は櫛描状の条痕が施されるものである。

図138～139-3はⅡ群Ａ類の円筒上層a式とした。図138-1～6は口縁部への原体の側面圧痕に加え斜状や弧状の隆帯が貼り付けられるものや、頸部に鼓状の貼り付けが施されるもの、図138-7～11は口縁部の並行圧痕間に刺突列が数段施されるもので、円筒上層a1式に比定される。図138-2は波頂部の直下に橋状把手と、斜位隆帯が貼り付けられている。図138-7は波頂部にＹ字状の隆帯が貼り付けられ、側面圧痕と半裁竹管状工具による連続的な刺突が交互に4～5段施されている。図138-13～図139-3は鋸歯状の側面圧痕が施されるもので、円筒上層a2式に比定される。図139-1・3は同一の大型個体で、斜位や横位の隆帯に加え円形の貼り付けが施されるものである。なお図138-12は口縁部隆帯の剥落等により主要モチーフは不明であるが、口縁形状や隆帯の貼付手法からこの類とした。

図139-4～7は口縁部の隆帯間に馬蹄形状圧痕の施されるもので、Ⅱ群Ｂ類の円筒上層b式に比定される。図139-4は小型の土器であるが、縦位隆帯間には刺突が施される。また図139-7は馬蹄形状圧痕にLとLR縄文の2種類の原体が使用されるものである。図139-8～11は口縁部の隆帯間に刺突列の施されるもので、Ⅱ群Ｃ類の円筒上層c式に比定される。口頸部全体に隆帯と刺突が施されており、図139-9・10では口縁に鋸歯状の隆帯も貼り付けられている。図139-12～図140-1は隆帯の貼り付けや刺突のみが施されるもので、装飾手法等からおおよそⅡ群Ａ～Ｃ類にともなうものとみられる。図140-2～7は地文縄文上に細い隆帯が施されるもので、Ⅱ群Ｄ類の円筒上層d式に比定される。図140-4は口唇の隆帯に代わり工具圧痕が施されるもの、図140-6は波頂部の表裏に楕円状の貼り付けが施されるものである。図140-8は地文縄文のみの波頂部で、Ⅱ群Ｅ類の円筒上層e式であろう。

図140-9～13はⅢ群土器で、図140-9・10はⅢ群Ａ類の牛ヶ沢(3)式、図140-11・12はⅢ群Ｂ類の蛍沢式、図140-13はⅢ群Ｃ類の十腰内Ⅰ式に比定されるが、Ⅲ群土器の出土は極めて少ないものである。図140-14～16はⅣ群で、中期から後期にかけての粗製土器である。図140-14は無文のもの、図140-15・16は地文縄文に折り返し口縁の土器である。

図140-17～33は小型土器を一括した。Ⅳ群の図140-29と33を除き、Ⅰ群Ｂ類からⅡ群Ａ類に伴うものであろう。完形品は図140-21だけで、残りは破片資料である。高台付の鉢形が比較的多くみられるほか(図140-18～25・27)、無文のものも一定量みられる(図140-20～23・28)。　(神)

剥片石器類(図141～図155)：以下に各器種ごとに記述する。

石鏃(図141-1～29)：29点図示した。図141-1～8はⅠ類。図141-1は基部の抉り調整が浅いⅠａ類。図141-2・3はⅠｂ類。図141-4～8はⅠｄ類。図141-4・5・8は基部側が丸く膨らむ木葉形。6は細長い菱形。厚さは薄手の(図141-4～7)と厚手(図141-8)がある。図141-91～29はⅡ類の有茎鏃。Ⅱａ類(図141-26)、Ⅱｂ類(図141-16・20)、Ⅱｃ類(図141-9～15・17～19・21～25・27～29)。鏃身の長い二等片三角形のもの(図141-9～12・14～16)、鏃身下半の両側縁が平行する五角形状のもの(図141-13・19・20・24・26)、鏃身が正三角形状のもの(図141-21～23・25)がある。図141-21・22は鏃身の割に太い茎が作られている。図141-28・29は薄い剥片を用い周縁調整で茎部を作り出したもの、29は石錐の可能性もある。

石槍(図141-30～図142-1～3)：9点図示した。図141-33・図142-1は器体に膨らみをもつⅠ類で、

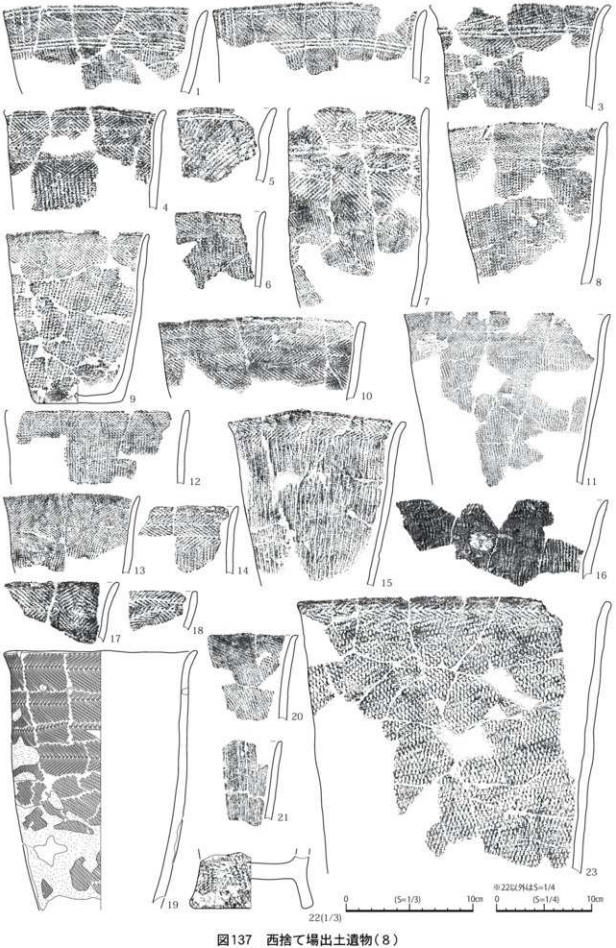

図137　西捨て場出土遺物(8)